奈良時代の須恵器

藤原　正大（横手市教育委員会）

Ⅰ　奈良時代の横手盆地と須恵器（図 1）

横手盆地は、秋田県内でも奈良時代の遺跡が最も多く確認されており、雄物川地域の造山遺跡群や、横手・平鹿地域にまたがる大戸川流域などに集中しています。さらに特筆されるのは、雄物川地域の末館窯跡や、横手・平鹿地域の中山丘陵に所在する竹原窯跡といった、灰白色で硬質な焼き物である須恵器を生産する須恵器窯が相次いで操業を始める点です。

須恵器生産は、粘土の採掘や製品の成形、製品を焼成する窯を築き、温度管理などを行って製品を焼き上げるまで、一定の技術がなければ生産を成しえません。須恵器の生産を継続的に行うには、技術を持った工人の確保や技術の伝習が必要であったでしょう。また、奈良時代の須恵器は、集落で広く用いられる土師器（野焼きで作られる素焼きの土器）と異なり、一般的に官衙（役所）に関係する施設から多く出土します。これは、須恵器が官衙に出仕する官人への給食や食器として須恵器が使われたことと関係があるといわれます。これらから、須恵器生産と官衙は地域ごとに多少の差はあっても一定の関わりがあったと推測できます。つまり、横手盆地の須恵器生産がどのように始まり、どういった特徴があるのかについて考えることは、奈良時代の律令国家が横手盆地にいつ頃、どのように進出したのか、どのようにこの地域を経営したのかを考える手がかりのひとつになるのです。

今回は、須恵器窯跡や集落遺跡から出土する須恵器の特徴（形態や製作に関わる技術的特徴）を確認し、奈良時代の横手盆地について考えていきたいと思います。

Ⅱ　横手盆地における須恵器生産の開始　末館窯跡と造山遺跡群（図 2）

1.　末館窯跡の操業

①　末館窯跡の立地と年代

雄物川地域に所在する末館窯跡は秋田県内でも最古級の須恵器窯跡といわれており、A 地点窯跡と B 地点窯跡の 2 基が調査されています。横手市役所雄物川庁舎の西南西約 2.8km、現在は温泉施設えがおの丘の所在する出羽丘陵東端部に立地し、眼下には雄物川が北流しています。造山遺跡群とは雄物川を隔てて約 2.5km の至近に立地します。調査の経緯等の詳細は昨年度の沼柵公開講座で報告していますが、発掘調査が行われた昭和 30 年代の記録を参照すれば、この 2 基以外にも窯跡が存在していたようなので、須恵器窯が複数基まとまって操業する窯跡群であった可能性があります。

ふたつの窯跡でいつ生産が始まったかについては、製品を製作する際の技術的な特徴や、製品がどの年代の土師器や他地域から搬入された須恵器と共伴するのかといった考古学的な事象を多角的に検討する必要があります。後述するように、末館窯跡製品が出土した遺跡の調査例は現在までのところ僅かで即断はできませんが、両窯跡とも概ね 8 世紀中頃（奈良時代の中頃）には

操業していたと推定され、この時期に横手盆地で須恵器生産が始まったと考えられます。

② 器種構成

末館窯跡の大きな特徴は、多種多様な器種が生産され、製品の規格性が高い点です。A 地点は高台付椀、高台付杯・蓋、杯、高台付盤、短頸壺蓋、鉢、擂鉢、長頸壺、甕の 10 器種、B 地点窯跡は椀蓋、高台付杯・蓋、双耳杯、杯、盤、短頸壺・蓋、横瓶、長頸壺、甕の 10 器種の生産が確認できます。杯に着目すると、奈良時代における須恵器の特徴である法量（器の大きさのこと）の規格性（法量分化といいます）がみられます。

③ 異なる製作技法**(図 3、4)**

ふたつの窯跡が近接して立地するのと対照的に、A 地点窯跡と B 地点窯跡では製品の製作技法に相違が認められます。一例を挙げると、須恵器杯の底部にみられる回転台からの切り離し方法と、その後の調整の方法に特徴があります。A 地点窯跡の杯は、回転台からヘラ状の工具で切り離した後、回転させながら工具で粘土を削り取るように、底部の外側を整形しています（これをヘラ切り後回転ヘラ削りといいます)。一方で、B 地点窯跡の杯は、ヘラ状の工具で回転台から切り離す点は共通していますが、底部を撫でて整形します（これをヘラ切り後ナデ調整といいます)。このため、A 地点窯跡の杯は底部外面にヘラ状工具で整えた痕跡として、砂粒の流れた痕跡が一定方向に円弧を描くようにみられますが、B 地点窯跡の杯には、不規則に砂粒が流れ、底部外面に小さな粘土塊が残っているのが特徴です。また、須恵器の蓋に貼付される摘みの形状にも明らかな違いが認められます。このような製作技法の違いから、それぞれの窯跡で須恵器生産に携わった集団は、「工房」としての一定のまとまりをもっていたと考えられます。先行研究では、A 地点窯跡は東山道系の、B 地点窯跡は北陸系の工人によって操業された可能性が指摘されています（島田 2005)。

以上に見たように、横手盆地の須恵器生産は遅くとも奈良時代の中頃（8 世紀中頃）には開始し、多種多様な種類の食器が生産されたことが分かりました。また、実際の生産には、製作技術の違いから様々な地域が関与した可能性があることを確認しました。次に、この時期の横手盆地で出土した須恵器についてみていきたいと思います。

2. 造山遺跡群の須恵器

奈良時代中頃段階の須恵器は、ほとんどが造山遺跡群で出土しており、末館窯跡では上で見たように多種多様な須恵器が生産されていましたが、実は現在までのところ、末館窯跡の製品が遺跡から出土した例は僅かです。一例を挙げれば十足馬場西遺跡出土の杯蓋は、橙色を呈し、形態・調整が A 地点窯跡出土杯蓋と類似するものがあります。末館窯跡が造山遺跡群にあった何らかの施設に製品を供給する窯であったとすれば、造山遺跡群の調査が進展することによって今後出土例が蓄積され、末館窯跡の操業年代が詳細に把握されるとともに、造山遺跡群の性格がより鮮明になると考えられます。

雄勝城・駅家研究会によって継続的に調査が行われている十足馬場西遺跡では奈良時代の須恵器が一定量出土しています。出土した器種は、高台付杯・蓋、杯、高台付盤、長頸壺、甕などがあり、一括で出土していないものの多種多様な器種が使用されていたことが分かります。

須恵器杯に着目すると、外面に黒い線状の痕跡が十字に残っています。これは「火襷」と呼ばれる痕跡で、窯で杯を多数重ねて焼成する際に、杯同士が癒着するのを防ぐ目的で藁などを挟め込んで焼成することがあり、これが黒い線状の痕跡として残ったものです。このような焼成手法

は後述する竹原窯跡で採られていますが、末館窯跡では確認されていません。また、先に見た末館窯跡の杯と同じく底部に着目すると、十足馬場西遺跡で出土した杯は回転台から切り離す際に糸が用いられ、回転させながら切り離したことが分かります。また、底部の外側にのみ工具で削りが成され整えられています（これを回転糸切り後底部外縁ケズリ調整といいます）。これらの特徴から、十足馬場西遺跡で出土した須恵器杯は、末館窯跡で採られた製作技術が用いられておらず、他地域から搬入された可能性があります。また、昨年度の調査で出土した高台付盤は末館窯跡の製品とは形態が異なり、これも搬入品と考えられます。十足馬場西遺跡以外にも、南田東遺跡、東槻遺跡などから須恵器が出土していますが、やはり末館窯跡製品と考えられるものは僅かで、形態・調整等もバリエーションに富み、他地域からの搬入品を多く含んでいると考えられています（横手市教委 2015）。これらがどこからもたらされたものかは他地域の生産地との比較を含め今後さらに検討が必要ですが、搬入品が多く確認されるという特徴は何らかの官衙に関連する施設の存在を窺わせます。末館窯跡の詳しい操業年代や製品の供給先についても、造山遺跡群の調査が進展するにしたがってより明確になる可能性があります。

Ⅲ　須恵器生産の拡大　竹原窯跡と須恵器の普及（図 2）

1.　竹原窯跡の操業

①　竹原窯跡の立地と年代

竹原窯跡は、中山丘陵北西部（現在の秋田ふるさと村から旭ふれあい館までの南北に延びる丘陵）の西側斜面に立地する須恵器窯跡です。窯跡の西約 2km には大戸川が北流しており、大戸川が形成した沖積地には宮東遺跡や宮下遺跡、下福田尻遺跡といった奈良時代の集落遺跡が多く立地しています。東北横断自動車道秋田線の建設に伴って昭和 63 年（1989）に発掘調査が行われ、SJ05、06 窯跡といった奈良時代中頃以降に操業した須恵器窯跡が確認されました（秋田県教委 1991）。中山丘陵には竹原窯跡のほかに奈良～平安時代の窯跡が多く点在しており、平安時代初頭の 9 世紀初頭に生産のピークを迎え、9 世紀後半に終焉を迎えるまでの約 150 年間にわたって須恵器生産を行う、北東北有数の須恵器生産地として知られています。

竹原窯跡 SJ05, 06 窯跡の操業年代については、SJ06 窯跡出土の杯と同一形態・同一法量のものが天平宝字（757～765）記年銘木簡を出した秋田市秋田城跡 SG1031 湿地上位木炭層から出土しています（島田 2005、横手市 2007）。周辺の集落遺跡である下福田尻遺跡でも、竪穴建物内から SJ05, 06 窯跡の製品と考えられる須恵器杯が 8 世紀中頃～後半頃の土師器と共伴しているため（横手市教委 2022）、この頃の操業と考えられます。これらのことから、竹原窯跡は末館窯跡よりやや遅れて生産を開始したと思われます。天平宝字 3 年（759）には雄勝城が造営され、さらに平鹿郡・雄勝郡が建郡されているため、このような歴史的事象や横手盆地の地域経営に伴って操業を開始したと考えられています。

②　器種構成

竹原窯跡は、末館窯跡と同様に多種多様な器種を生産しています。SJ05、06 窯跡は高台付杯・蓋、杯、短頸壺・蓋、長頸壺、甕の 7 器種が、周辺の奈良時代の灰原（窯の中から排出された灰や焼き損じ品を捨てた場所）からは高台付椀・蓋、高台付杯・蓋、杯、高台付盤、短頸壺・蓋、平瓶、長頸壺、甕の 11 器種があり、杯類にはやはり法量分化が認められます。

③ 製作技法の特徴　末館B地点窯跡との共通性と相違(**図5**)

竹原窯跡の須恵器杯の底部を見ると、基本的にヘラ切り後ナデ調整で、先に見た末館B地点窯跡と特徴が共通するようです。しかし、そのほかの技術的な特徴を確認すると細かい相違が認められます。例えば、高台付杯の高台を見ると、末館B地点窯跡の資料は短い高台を底部と体部の境に張り付けるに対して、竹原窯跡の資料は高さのある高台を底部のやや内側に貼り付けています。末館窯跡の工人集団が、竹原窯跡と同一、もしくはなんらかの関係があるかはこのほかの特徴を含めて改めて検討が必要ですが、須恵器の技法的な特徴は、「工房」のなかである程度共有されると考えられるので、ふたつの窯跡が、異なる工人集団によって操業した可能性は想定されます。ところで、末館B地点窯跡の杯には火襷はみられませんでしたが、竹原窯跡の杯には十字の火襷が確認されるものがあります。焼成手法からみれば、杯類に関しては異なる窯入れの方法が採られていた可能性があります。

2. 竹原窯跡の須恵器の供給

竹原窯跡で生産された製品は、末館窯跡のものと異なり、集落遺跡で比較的多く確認されています。特に、大戸川流域に形成された奈良時代の集落遺跡では、前述の下福田尻遺跡などで、杯類やそれに伴う蓋、甕などの貯蔵具が出土しています。横手盆地の集落遺跡に須恵器が供給され始めるのは8世紀中頃～後半の段階と考えられ、集落遺跡でも須恵器が一定量出土するのは平安時代（9世紀初頭）に入ってからです。また、前述のように秋田城でも竹原窯跡の製品に類似する杯や杯蓋などが出土していることが指摘されているので、竹原窯跡の製品が秋田城や雄勝城などの城柵遺跡をはじめとした官衙に関連する施設に製品を供給することを目的として操業を開始した可能性があると思われます。造山遺跡群では、東槻遺跡で竹原窯跡製品と考えられる杯蓋が出土しており、造山遺跡群にも製品が供給されたと考えられます。

今回の報告では、横手盆地に所在する須恵器窯跡である末館窯跡と竹原窯跡を取り上げ、操業を開始した年代や須恵器にみられる技法の特徴などについて検討しました。また、集落遺跡での須恵器の出土状況も検討し、造山遺跡群をはじめとする遺跡でどのような須恵器が出土しているかについても確認しました。十分な検討を加えるに至りませんでしたが、横手盆地の奈良時代の須恵器について考えることは、冒頭で述べたように律令国家の進出過程や地域経営を明らかにするうえで重要です。

引用・参考文献

秋田県教育委員会 1991『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI』秋田県文化財調査報告書第122集

島田祐悦 2005「横手盆地の奈良期における須恵器編年―末館窯跡の再検討―」『秋田考古学』49 秋田考古学協会 pp. 35-88

藤原正大 2021「官窯・末館窯跡と造山遺跡群」『令和3年度第10回後三年合戦沼柵公開講座資料集』

横手市 2007『横手市史　資料編　考古』

横手市教育委員会 2015『南田東遺跡』横手市文化財調査報告第36集

横手市教育委員会 2022『下福田尻遺跡・下福田東遺跡』横手市文化財調査報告第56集

図版出典

図1　横手市教育委員会が作成　　図2 秋田県教委 1991、島田 2005、藤原 2021 より引用、一部改変

図3、4 島田 2005 より引用　図5 秋田県教委 1991、島田 2005 より引用

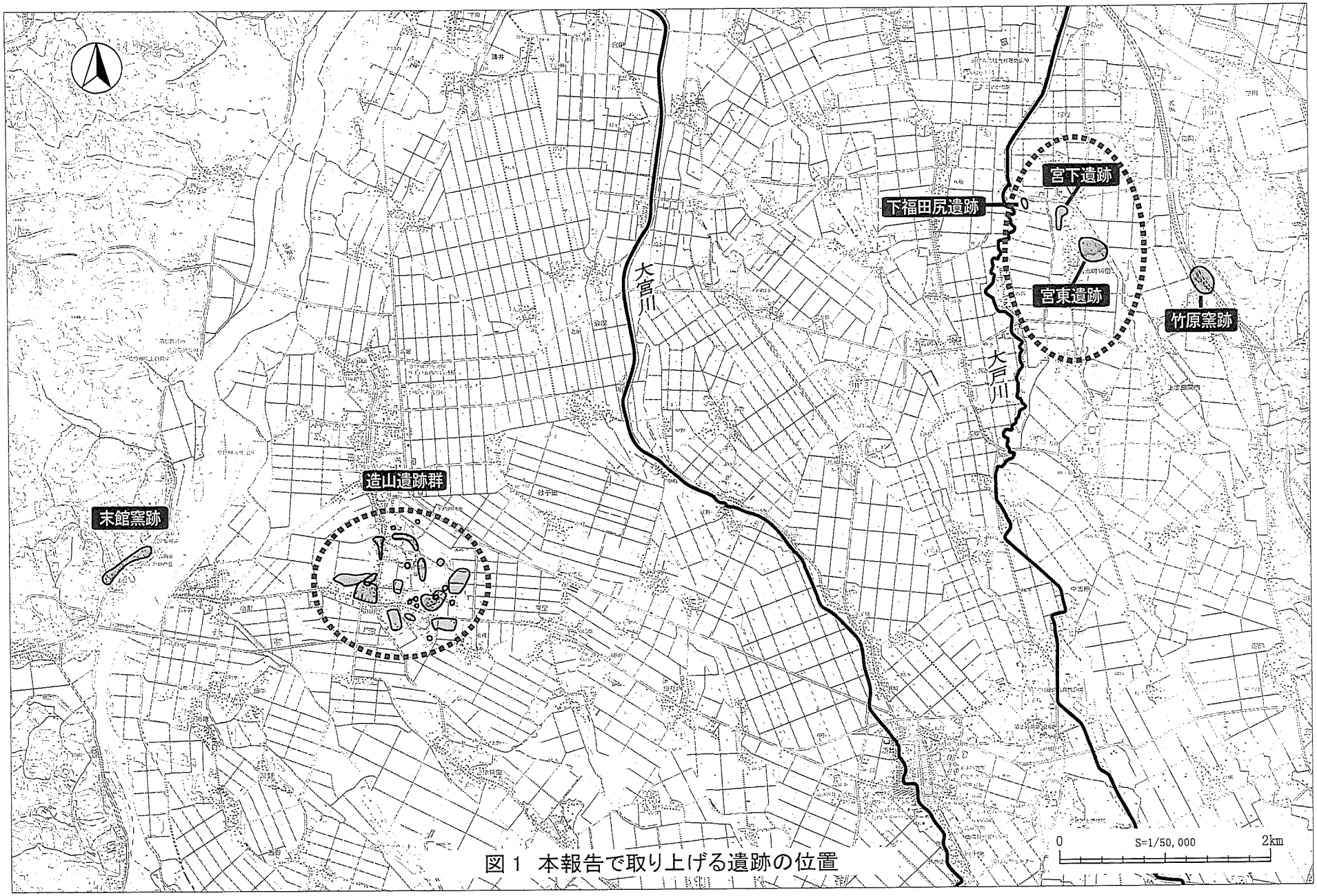


図１　本報告で取り上げる遺跡の位置

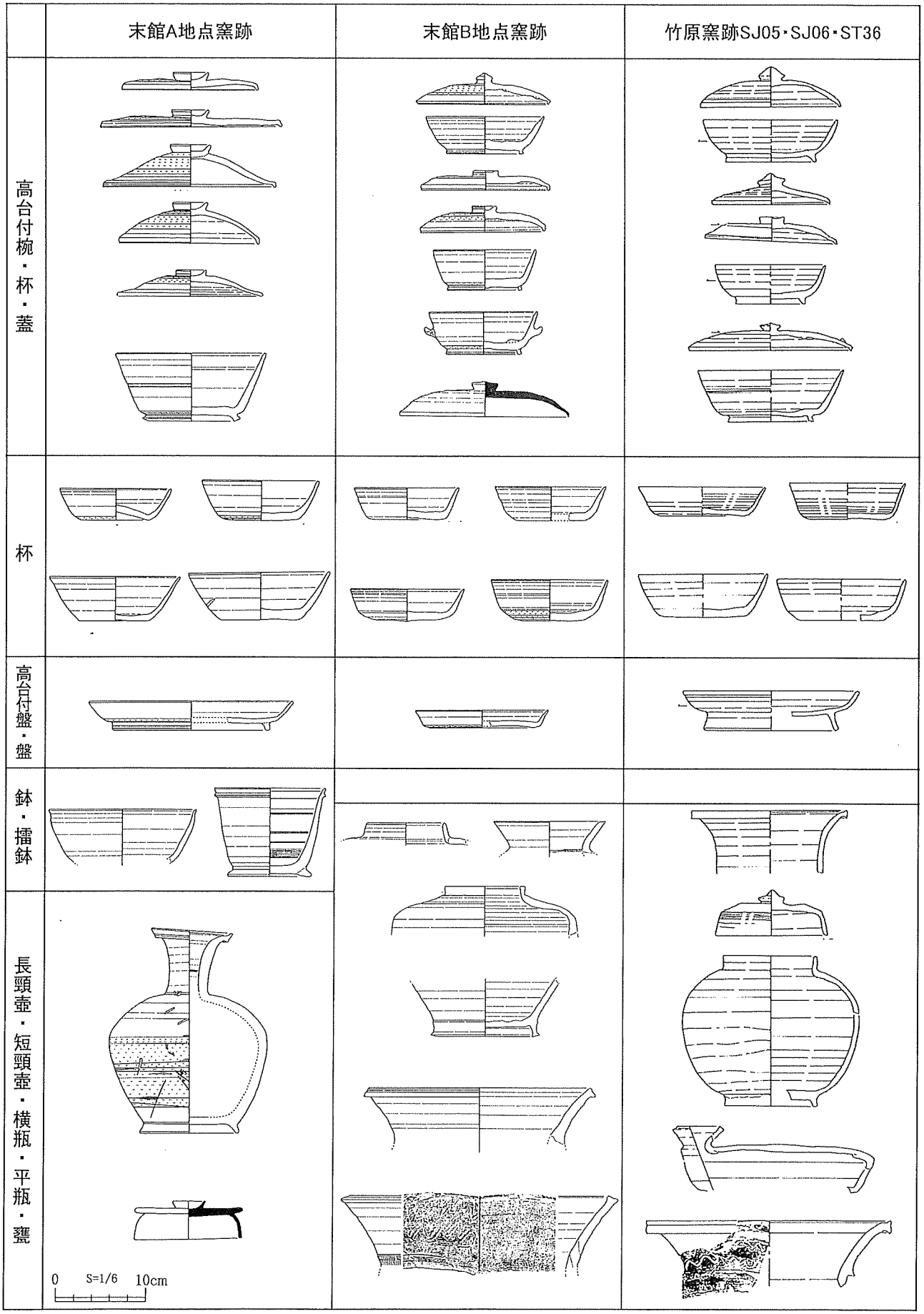
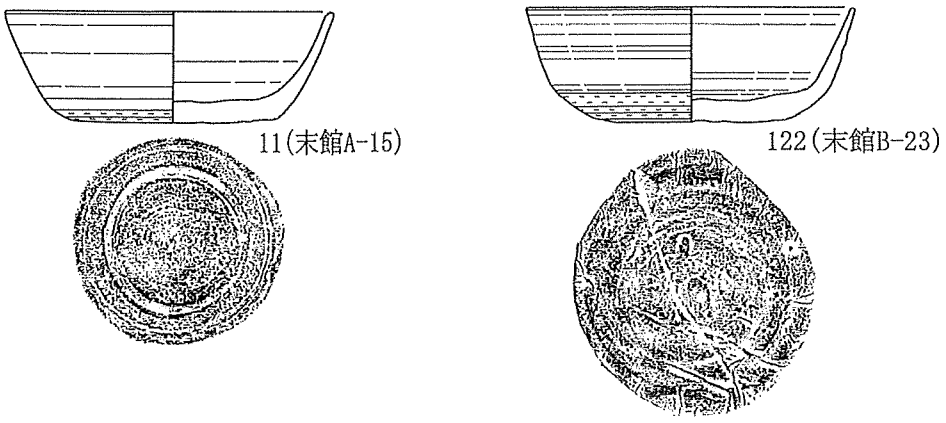


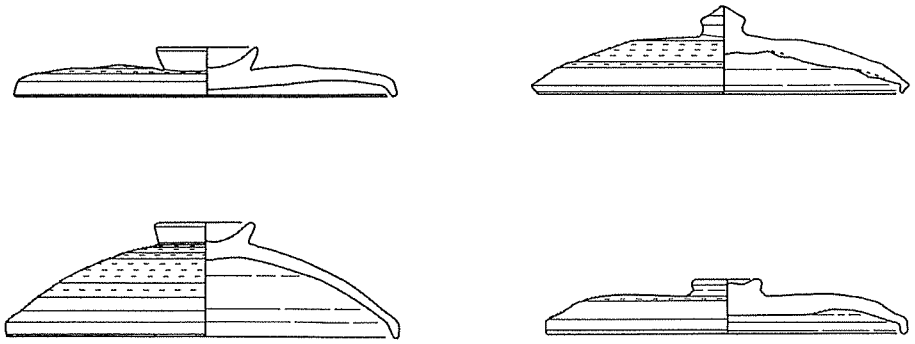
図 2 奈良時代の須恵器窯跡出土土器（報告者が主要な器種を抜粋）



末館 A 地点窯跡
ヘラ切り後回転ヘラケズリ調整

末館 B 地点窯跡
ヘラ切りナデ調整

図 3 須恵器杯にみられる調整技法の違い



末館 A 地点窯跡

末館 B 地点窯跡

図 4 須恵器蓋にみられる摘みの形状の違い

末館 B 地点窯跡

竹原窯跡 SJ05

図 5 高台付杯の高台部の違い

0 S=1/3 10cm